

公式訪問卓話 超我の奉仕 SERVICE Above Self

国際ロータリーは、ロータリーの101年、奉仕の第二世紀最初の年度を迎えております。R I カール・ヴィルヘルム・ステンハマー会長は、2005年〜'06年度のテーマとして、『超我の奉仕』**Service Above Self**.を掲げています。そしてロゴマークは、我々ロータリアンが常に誇り高く胸に刺しているピン、ロータリーの歯車そのものであります。

そして、今期の強調事項としましては、「識字率の向上と教育」そして「水保全、保健、飢餓」の二つであります。私はステンハマーさんが特に強調されていた「継続性」と「公共的イメージ」の二つも追加させて頂きました。

現在、各クラブにお願いをしていますのは、今期のR I 会長賞への挑戦であります。①必須項目となっている会員増強、②公共的イメージ、③クラブ奉仕、④職業奉仕、⑤社会奉仕、⑥国際奉仕、と6項目となっておりますが、この中から5つの項目に挑戦する事であります。

今ロータリーは「原点への回帰、基本に立ち返ろう」という事が盛んに言われております。

原点に戻る、基本に立ち返ると言っても、ポールハリスと3人の仲間の時代に戻ると言うことではありません。ロータリーの基盤となった「変わることをない原理原則」これを守ろうと言う事であります。そういう意味でも今期のテーマ「超我の奉仕」は誠に「的を得た課題」であるかと思えます。

『超我の奉仕』**Service Above Self**.は、国際ロータリーの第一の標語であります。そして第二の標語『最もよく奉仕するもの、最も多く報われる』**He Profits Most Who Serves Best**.と共にロータリーの永遠のテーマであり、我々ロータリアンが目指す『奉仕の理想』の究極的な目標でもあります。

ご存知の様に『超我の奉仕』は、1911年(オレゴン州)ポートランドの国際大会で、ミネアポリスRC会長のフランク・コリンズが **Service, Not Self**.『無私の奉仕』と言ったのが最初であります。これが後に **Service Above Self**.『超我の奉仕』に修正されたものであります。

2月19日、アナハイム国際協議会の第一日目、朝の第1回本会議で、ステンハマーさんが壇上に立ちますと、すぐにバックスクリーンに **SERVICE Above Self** が映し出されていきました。『超我の奉仕』はあまりにも有名な標語でありました。誰一人としてそれが年度のテーマだとは気が付きませんでした。ややしばらくして同時通訳によって『超我の奉仕』がロータリー101年、新世紀初の年度の記念すべきテーマであると知らされて、一瞬、「ええー、なんでえ！」と言う驚きと、大きな歓声と拍手

が沸き起こりました。

そして、この毎年出されますR Iの年度テーマと言いますのは、1949～'50年度のパーシー・ホジソン会長の時に初めて「テーマ」というものが出されています。

そして、手続要覧の中にも記載されていますが、現在ではこのR Iテーマだけが活用すべき唯一のテーマとなっています。

アメリカ・カリフォルニア州アナハイムで、毎年開催されてきた国際協議会は、数多くのガバナーエレクトを育ててきた所ですが、会場であるヒルトンアナハイムホテルも、私の年度が最後となりました。来年2月の国際協議会は同じカリフォルニア州サンディエゴで開催されることになります。そうした意味でも、私に取りましては、大変に感慨深いものがございました。

ステンハマーさんはテーマの発表に際して、この様に言っております。

「私達が方向を見定めるための輝く星が必要です、すなわち、私達が拠りどころとするテーマです。そして、これまで国際ロータリーの最高の傑作と言われながらも、標語として一度も使われていないものを選びました。それが『超我の奉仕』です。1911年ロータリアンは『超我の奉仕』という標語を熱意を持って採択しました。それは、この標語が、生れたばかりの組織が発展の途上にある中、その理想を巧みに言い表していたからです。」と言っていますが、1911年の採択と言う部分が我々の解釈とは少々違っているように思います。

また、この様にも言われています。「これまでの世紀に、ロータリアンが書き記してきた数々の叢智に満ちた言葉に目を向けました。私たちの思考を導き、行動を促すあらゆる感動的なメッセージの中でも、ロータリーの標語『超我の奉仕』の5文字ほど、的確にロータリーとロータリアンの精神を言い表している言葉はありませんでした。」とも言っております。

しかしながら、ステンハマーさんからは、肝心な『超我の奉仕』というテーマについて、これ以上の詳しいコメントは一切ありませんでした。

2005年2月23日、ロータリーは100周年の記念すべき時を刻みました。そしてその時、私はアナハイムの国際協議会五日目を迎えておりました。朝の本会議において、元R I会長ビチャイ・ラタクルさんの「ロータリーの100周年：四大奉仕部門」について、誠に感動的な講演がございました。そして、ラタクルさんが、そのお話の中で『超我の奉仕』について、みごとに解答をだしてくれています。

ロータリーの友5月号にも紹介されていますが、印象に残った一部を紹介したいと思います。

- ・ クラブを充実させる方法は、基本に立ち返り、ロータリーの礎石となった「変わることのない原則」を守ることである。
- ・ 基本に立ち返るとは、ロータリーの心臓の鼓動であるクラブ奉仕に「一心に心を傾けること」である。

- ・ 積極的なクラブ奉仕は、献身的な会員のいる生き生きとしたクラブへの道であります。
- ・ 活発なクラブ奉仕は、結束力を強固なものにしている「ロータリーの哲学と原則」そのものであります。
- ・ ロータリーの強みは、世界中の地域社会に存在する行動力ある指導者の一団として、偉大な可能性を秘めている会員の集合体であり、ロータリーが単なる楽しい親睦目的の社交クラブやどこにでもある慈善団体ではなく、ロータリーは生き方そのものであり、心の持ちようであり、また、精神のありようであります。

そして、標語『超我の奉仕』で強調されるべきは、最初の二文字「超我」という言葉であり、奉仕の実践にあたり、自らに問いかけてみることである。

- 1 ほかに人々に施したことを忘れ、ほかに人々から受けた恩を心に刻むことが出来るか？
- 1 世界から恩恵をこうむるなどということは考えず、世界に対して何をしなければならぬかを考えることができるか？
- 1 友人の心の奥に秘められている思いを、自分のものとして受け止めることができるか？
- 1 自分が存在する最も尊い理由は、人生から何を得るかではなく、人生に対して何を与える事が出来るかと言うことを認識できるか？
- 1 森羅万象に対して不平を口にすることなく、わずかでも幸せの種を播ける場所に目を向ける事ができるか？

これらに「できる」と答えられれば、我々は、ロータリーの「奉仕の種を播く」ことができ、新世紀の新たな日の出に向かって進む事ができます。

というすばらしいお話でありました。

話は変わりますが、我々ロータリアンは、国際ロータリーを語る上で、必ず四人の先駆者の名を思い起こさなければなりません。

一人は、ポール・ハリス **Paul P. Harris** であります。二人目は、アーサー・シェルドン **Arthur F. Sheldon** であります。三人目が、チェスリー・ペリー **Chesley R. Perry** であります。そして最後の一人がアーチ・クランプ **Arch C. Klumph** であります。

- ・ ポール・ハリスは、ザ・ファースト・ロータリアン（最初のロータリアン）として、ロータリーに生命を与えた創始者であります。
- ・ アーサー・シェルドンは、ロータリーに『サービスの理念』 **The Ideal of Service** というソフトを与えた人であります。
- ・ チェスリー・ペリーは、ロータリーにハードとしての国際ロータリーの組織と礎を与えた人であります。
- ・ アーチ・クランプは、ロータリーにロータリー財団という財政の基盤を与えてくれた人であります。

おそらく、この四人なくしては、今日のロータリーは存在しなかったと言っても過

言ではないのであります。

今期のテーマ『超我の奉仕』を踏まえまして、ロータリーの二大標語について、もう少しお話をしておきます。

アーサー・フレデリック・シェルドンは、「ビジネスはすべて社会に尽くす手段でなければならない」と信じて、1910年に、ロータリーの最初の大会において”He Profits Most Who Serves His Fellows Best”『最もよく仲間に奉仕する者は、最も多く報われる』と主張しました。

1911年ポートランドで行われた第二回大会で、米国ミネアポリスRC会長のフランク・コリンズは、他人のために尽くす意義と重要性を説いて、「ロータリークラブは”Service, Not Self”『無私の奉仕』を根本精神として結成されなければならない」と強調しました。

この二つの言葉はその後”He Profits Most Who Serves Best”『最もよく奉仕する者、最も多く報われる』および”Service Above Self”『超我の奉仕』と修正されています。そして、今日この二つの標語が、ロータリーの誇る二大スローガンとなり、我々ロータリアンの座右の銘となっています。

ですから、先ほどのスタンハマーさんのコメントの中にありました『超我の奉仕』が1911年に採択されたとありますが、残念ながらこの事実はありません。フランク・コリンズの言った『無私の奉仕』が、何時の時点で『超我の奉仕』に修正されたかは定かではないのであります。唯一つロータリアンのバイブルとも言える1923年の「社会奉仕の声明」の決議23-34の中に、初めてこの『超我の奉仕』が明文化されて登場しています。

- ・ ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕―「超我の奉仕」―の哲学であり、「最もよく奉仕する者。最も多く報われる」という実践理論の原則に基づくものである。

と謳われています。

そして、この二つの標語がロータリーのモットーとして公式に採用されたのは1950年の事であり、その後1989年の規定審議会で『超我の奉仕』”Service Above Self”がロータリーの第一標語になっています。

1906年1月19日に採択された、シカゴ・ロータリークラブの最初の定款というのがあります。

第一条 本クラブ会員の事業上の利益の拡大

第二条 通常社交クラブに付随する親睦およびその他の特に必要と思われる事項の推進

と言うこの二つでありました。これからも分かりますように、ロータリーの出発は[親睦と事業上の利益の追求]という誠にエゴイズムに満ちたものでありました。

残存している資料によりますと、統計係 **Statistician** という役職をもうけて、前回の例会以降の会員どうしの取引、これを売り、買い、仲介別に申告させて会員別の一覧表を作り、その結果に一喜一憂したことが記載されています。

この事からも、ロータリーに「奉仕の概念」サービスが芽生えたのは、1911年のポートランドの全米ロータリー大会において、『最もよく奉仕する者、最も多く報われる』”**He Profits Most Who Serves Best**”が採決された後の事であります。

そして、翌1912年、デュールーズ国際大会で、定款の中の「綱領」の中心的観念として”**The Ideal of Service**”『サービスの理念』が登場しました。これが日本風に翻訳されたものが、皆さん方が良くご存知の『奉仕の理想』であります。

『奉仕の理想』の目的は、ロータリーの綱領が掲げているロータリーの理想とする四大奉仕、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の活動を推進することにあります。そしてクラブが効果的なクラブとなるよう指導育成する事にあります。

現在日本のロータリアンは毎年5千人が何らかの理由で減少しています。クラブの活性化と変化に対応するロータリーがいま問われています。

今期7月1日付けの我が地区の会員数は、遂に2,900台を切ってしまいました。2,837名でのスタートであります。前年度に比べますと86名の減少となっております。

我が2770地区でも(DLP)地区リーダーシッププランが採用されてから、早くも7年目となっていますが、最近になって(CLP)クラブリーダーシッププランという言葉が頻繁に耳にするようになりました。

組織図を見ますと、今までの四大奉仕部門とは少し違った編成になっており、戸惑う事がありますが、CLPはあくまでも今までの四大奉仕に基づく「行動面での効果的な委員会編成」に変えることが第一の目的であります。

組織面、機能面、運営面において、今までよりも一段とガバナーとクラブ会長との絆を強め、DLPによるガバナー補佐制度を今までよりも一層機能させて「効果的なクラブ作り」を行い、クラブを活性化させるという意味合いがあります。

いよいよ今年9月に開催されるGETSには、次年度の方向付けとしてCLPに本格的に取り組む方向で進んでくるかと思えます。

今年2月の国際協議会の席上、我々はこのCLPについて、RIの研修リーダーに質問をしたのですが、その時点でははっきりとした解答を得られませんでした。

来年2006年のPETS(会長エレクト研修セミナー)及び地区協議会の時は、このCLP(クラブリーダーシッププラン)が主役の課題となり、年度計画書などもこれに添って委員会編成などの手直しをするようになるものと思えます。

皆さん方のクラブも、それなりの対応を迫られるかと思えますので、出来るだけ早く、ガバナー補佐を通じて情報を流したいと思えます。

来期はグループの再編成もありますので、ちょっと忙しくなるものと思えます。

地区運営方針

年度の開始にあたり、私は「ロータリアンをふやそう！」あなたはロータリアンですか？それとも単なるクラブ会員ですか？と問い掛けをいたしました。

100周年記念誌として発刊された「奉仕の一世紀：ロータリアン物語」に目を通して、はっと気がついたからであります。作者のデビット・フォワードさんが、ある二人のバスターから「クラブ会員である事と、ロータリアンである事の違いを示された。」という文章に接したからであります。

現在、クラブ会員の70%は単に昼飯を食べに来る会員であります。昨今ではその昼飯さえも食べに来なくなった会員が増加しております。

『超我の奉仕』新世紀初の年度を迎え、我々は「奉仕の理想」を実践するロータリアンとしての心構えを、今一度見直すべき時と考えます。真のロータリアンをふやすこと、今それが必要であります。

そして **Do Good in the Community and World.** 「地域社会と世界のために良いことをしよう！」を提案させて頂きました。

4月の地区協議会の会長部会で既にお話を致しましたが、現在2770地区では、2007年の4月に開催される規程審議会に向けて、一つの立法案（制定案）を準備中であります。

1995年の規程審議会で例会メイクアップ期間が前後7日間から14日間に緩和されました。本来の目的は、メイクアップをし易くし、出席率を上げ、若い人たちの入会をしやすくし、会員増強をはかることを目的としていましたが、逆にこれを契機にメイクアップはほとんど皆無となり、出席率の低下や会員減少をも併発し、ロータリー全体のイメージの低下を喚起してしまいました。これを踏まえて例会メイクアップ期間を前後14日から7日に戻そうと提起するものであります。

ロータリーの「原点への回帰」という意味合いに於いて、今年の10月の地区大会決議として今準備を勧めております。

森田年度の特徴

- ① 地区指導者の育成・強化のため、地区役員の人数を約20%増員致しました。
- ② レディース増強推進チームを継続強化し、本格的な女性会員の増強を行なっています。
- ③ 公共的イメージ推進のため、今までの家族委員会を広報・新世紀家族委員会とさせて頂きました。
- ④ 会員基盤の維持を前提としたロータリアンのための、健康保持・増進委員会を職業奉仕部門の中に設置させて頂きました。
- ⑤ 新世代育成委員会とライラ委員会を合体して、新世代育成・ライラ委員会と致しました。

- ⑥ 今期の公式訪問は83クラブ全てを行ないます。四大奉仕及び小委員長全員の報告を頂きます。「ロータリーの原点への回帰、基本に立ち返る」ことが目的です。
- ⑦ 地区大会の開催は、2005年10月15日と16日です。そして本大会は16日の一日のみとなります。
- ・ 第1日目は、午後より地区指導者育成セミナーを開催します。夜はR I 会長代理歓迎晩餐会となります。
 - ・ 第2日目は、午前中が会長幹事、四大奉仕委員長会議です。午後からが一般ロータリアンの参加を頂く本大会となります。

今期地区委員会の編成で痛感した事。

- ・ D L Pの完全実施以来、全ての委員会が3年委員会となりましたが、これが上手く機能していませんでした。
- ・ 各クラブ1名の委員の推薦を依頼しましたが、すこぶる反応が悪く、地区委員会の多くが人財不足に陥っていました。
- ・ 結果として、効果的なクラブの指導の下に、地区指導者の育成が急務と考え、委員20%の増員を計りました。

クラブとして即対応してほしい事。

- ① R I 会長賞プログラムへの挑戦
- ② 会員増強純増3名以上の達成と退会防止
- ③ 社会奉仕プロジェクトへの地区補助金の活用
- ④ ロータリー財団への支援

年次寄付	200ドル以上
ポリオプラスパートナー	10ドル
- ⑤ ロータリー米山記念奨学会の支援

年次寄付	20,000円以上
------	-----------

今期は、『超我の奉仕』Service Above Selfのテーマの下に、皆さん方と共に『奉仕の理想』の実践に取り組んで参ります。

Do Good in the Community and World.

地域社会と世界のためによい事をしよう！

これが、我々ロータリアンが成すべき目標であります。